

豪俠<sup>ごうきやく</sup>画人<sup>がじん</sup>と<sup>と</sup>た<sup>た</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup> 野沢<sup>のざわ</sup>如洋<sup>じよよう</sup>

野沢如洋は、弘前が生んだ不世出の画人である。

如洋は幼少のころから画筆に親しみ、十二歳のとき弘前の画家三上仙年の門に学んで頭角をあらわし、師から仙蘭の雅号を与えられた。

二十三歳のとき画家として立つことを決心し、画道の修業を志して東京や北海道を巡遊したが、祖父の病気のため帰郷した。二十八歳のと

きこんどは京都に出て居を構え、貧苦の中で画道に精進したが、そのころから雅号を如洋に変えた。如洋の画は各種の展覧会で賞を得て、

その画名は一時に揚がり、京都画壇の彗星として非凡な画才を認められた。

日露戦争勃発の一九〇四年（明治三十七）、四十歳の如洋はひとり日本を去って中国に渡った。中国を旅すること四年余り、各地の古い名

画を見るにおよんで、如洋は自分の筆力の不足を痛感して、なお一層の刻苦勉励を心に誓った。また旅行中に文部省美術展覧会の審査員に

推薦されたが固辞し、また一切の展覧会にも作品を発表することなく、ひたすら自分の理想とする画道に励んだ。

如洋は中国各地の山河を跋涉して南画の真髄をとらえたが、次いで第一次世界大戦直後の一九一九年（大正八）には欧米に旅行すること

一年余り、ここでも各地の山水風物を写生してその画囊を肥やした。帰国してから、さらに台湾や韓国の山川をも踏渉して画材を豊かにし

た。

如洋の絵のすばらしさは南画の山水にあったが、人物や、風俗、花鳥、動物などもよくし、特に南画家の本領である席画に至っては、その筆勢が縦横無尽で人々を驚嘆させた。中でも馬を描かせては右に出る者が無いといわれ、「馬の如洋」の名を欲しいままにした。如洋は

一九三七年（昭和十二）六月五日、紙に向かって画筆をとりながら脳溢血に倒れ、五日後に死去したが、その一生は文字通り画と共に生き、画と共に死すの観があつて、天衣無縫、ひたむきに生き抜いた生涯は、まさに弘前人の典型であつた。如洋の画業と人となりを讃える「如洋碑」は、弘前市西茂森町仏舍利塔境内に建立されている。

野沢如洋は、一八六五年（慶応元）四月三日、父弘前藩士一戸忠蔵、母りゅうの四男として弘前袋町（現在の弘前市大字袋町）に生まれた。三千治と名づけられたが、幼少時代の愛称は「太郎」だった。

如洋が数え年三歳の一八六七年（慶応三）四月、父忠蔵が亡くなり、長兄忠吾が家督を継いだが、忠吾もまた一八七二年（明治五）に死去した。夫に先立たれ、頼みの跡取りにも死なれたりゆうは、女手一つで残された四人の子供を育てあげた。

如洋が画を描きだしたのは三歳のころであつた。夜中に寝ている如洋が突然泣き出したりするので、姉のたきが、「どうした。」となだめ

すかすと、「わアの描いた人ア化けて来た。」と言ってますます泣きつづける。言われて如洋の枕元にある絵を見ると、目だけを描いてひとみを入れていないではないか。そこでたきは「目玉を入れれば化けて来ないから。」と教えたというが、これは画家として名をなす如洋の片鱗へんりんがうかがえるエピソードであろう。

「太郎」と呼ばれた少年時代の如洋は、手のつけられない腕白わんぱくで、袋町はもちろん下町一带に鳴り響いたガキ大将であった。明治時代の弘前は、まだ城下町の気風が残っていて、上町、仲町、下町の地区に分かれての子供たちのけんかが絶えなかった。一戸の太郎は下町の大将で、仲町の子供達と田圃たんぼでとつくみ合いのけんかをして、勇名をとどろかした。さらに成長すると、如洋はネプタけんかの豪傑として、敵味方ともに知られた存在であった。その頃の弘前のネプタけんかには、棒、木刀、竹槍などを持ったが、中には抜刀して斬り込む者もあり、死者が出るのも珍しくなかった。その中で如洋は、素手のままでネプタけんかに加わり相手の木太刀を奪い取ってたたきのめしたという。しかし如洋は単なる乱暴者でなく、いつも相手から仕かけられた時に受けて立つというやり方であった。

如洋が正式に画を習い出したのは十二歳の時である。その画才が隣り近所の評判となり、好きな道に進ませようと親類の話もあって、一八七六年（明治九）、五十石町で画塾を開いている弘前きつての画家、三上仙年に入門した。如洋が入門したいきさつを、如洋の弟子である須藤聖馬は、次のように述べている。

太郎少年が十二歳のころ、隣り町の五十石町に住む南画の雄、三上仙年塾に二つ年上の友だちが通っていたが、毎日のように五十石町の悪童どもにいじめられ、泣いて帰るので、その少年の母から頼まれて太郎は護衛の役を引き受け、仙年の画塾に顔を出す機会を得、友だちの手習いのすむまで待つのが常となった。

ある日、太郎は、退屈まぎれに指の先につばをつけて、縁先の板にランをらくがきしているのを仙年が見て、「そののわらしコ、ここさ上がれじゃ、筆と紙やるはで、描いでみれ。」と気軽に声をかけた。が、太郎少年はおくする様子もなく筆をとり、ランの絵を描いた。その絵は、三年間も通いつめている子供らをはるかにしのぐものがあつたので、仙年はびっくりした。

翌日、仙年は衣服を改めて一戸家を訪れ、「月謝や筆墨紙料はいつさいいらなから、ぜひ私の画塾に寄こしてくれ。」と丁重に申し入れた。母は大いに恐縮きょうしゆくし、仙年の懇情こんじょうに感謝しながら、喜んで入門させることにした。それは、塾に通う時だけでも、太郎の腕白さに心配することがないためでもあつた。

非凡な画才をもった如洋と、その才能をいち早く認めた師匠仙年との出会い——ここから少年如洋の本格的な絵画の修業がはじまる。

さて、如洋が十五歳になった一八七九年（明治十二）十月、母りゅうの実家、弘前田町野沢家の智養子むととなった。この年八月、野沢家の

戸主徳弥が病死した。野沢家は隠居した祖父のほかは女ばかり六人の家庭で、徳弥が死んだあと、急いで養子を決める必要に迫られた。祖父は自分の血をうけた外孫の如洋を野沢家の跡取りにしようと、如洋を養子として入籍したのである。はじめ如洋は養子の話に容易に納得しなかったというが、ほかならぬ母の実家の存亡にかかわる重大事であり、説得されてやむなく従ったという。ここで一戸三千治から野沢三千治となったが、野沢家に入籍したものの当分一戸家での生活が続いた。まだ母への愛着が絶ちきれぬ年齢であったのに加え、三上仙年塾での画業をこれまで通り続けるためにも、ただちに野沢家の人となることができなかったのである。

仙年の画塾で修業すること六年、如洋の進境は著しく、一八八一年（明治十四）五月には師仙年から仙蘭の画号を与えられた。『野沢如洋伝』の著者、森山泰太郎氏は仙蘭の名の由来について「仙はいうまでもなく魯仙（仙年の師匠平尾魯仙）——仙年とつづいた栄光の名であり、蘭は東洋画という四君子（蘭・竹・梅・菊）の尤なるものである。優雅でかおり高く、万人に愛賞される。仙蘭の号は、仙年にとって、その力量を信じ将来の大成を疑わない弟子に与える最高の号を意味するのではないかと思われる。」と書いているが、まさにその通りの命名だったろう。

ところが、上達するにつれて、如洋は師仙年の指導にあきたりなさを感じてきた。そこでひそかに他流派の画風を学び、もっぱら写生に打ち込んで画技を練ったが、それが仙年の心証を害し、いたく叱責されたうえ破門されてしまった。如洋は自分の目を信じ、よい画はよい

面として認め、流派にとられることなく、研鑽けんさんに励んだのだが、老いて保守的な師匠は、それを許さなかったのである。破門されたが如洋はそれを少しも苦にせず、以前に倍して稽古に励んだ。が、天才児を破門した仙年は張り合いをなくし、うつうつとして楽しみもなく、後悔の思いに悩まされた。たまりかねた仙年は、ついに一戸家を訪ね、自分の軽率をわびて破門を解いたという。破門した弟子にわびを入れ、再び通塾を乞うなど普通の師匠ならやるはずがないのだが、仙年はよほど如洋の才能を認め、その人柄を愛していたに違いない。和解のあと、仙年を敬愛する如洋の気持はいよいよ深くなったというから、師匠も弟子も並の人間でなかったことがうかがわれる。

一八八五年（明治十八）十月、如洋は生活のため青森県巡査を志願し、めでたく合格した。月給六円であった。窮迫していた野沢家にとって、六円の収入は貴重であった。ところが、折角巡査になったのにわずか三ヶ月しか続かなかった。如洋が武勇伝を發揮し、けんか相手を負傷させたからである。

一八八六年（明治十九）一月十三日のこと、青森県庁の前にある巡査分宿所で、けんかが始まった。九州人の巡査（警部ともいう）日高藤吉こと長渡藤吉と、同僚で津軽人の佐藤英五郎の争いだった。長渡は日ごろから津軽人を軽蔑けいべつしていたが、これを快こころよから思っていた佐藤と口論のうえ大格闘になった。たまたま傍かたわらにいた如洋が仲裁しようとして、二人の間に割って入ったところ、逆に長渡から暴力を振るわれた。これに憤激した如洋は、長渡に対する日ごろの鬱憤うっげんが一時に爆発して猛然と襲いかかった。早速、そばにあった鉄瓶てつびんの熱湯をか

けて後頭部に火傷を負わせ、つづいて前頭部に裂傷を負わせた。左の人差し指と右の親指、さらに左の耳に噛みつき、耳たぶの三分の二を切り取ってしまった。この事件のため、如洋は一月十五日付で免職となり、上官反抗傷害の罪名で収監された。また、如洋の上官反抗傷害事件の公判のとき、判事がすこぶる高飛車な言葉で、その行為をなじったところ、被告席の如洋は、いきなり裁判官席に飛び上がって判事に迫った。驚いた判事は青くなって法廷を逃げ出したというが、如洋の言い分は、「相手が悪くて売られたけんかなのに、自分ばかりが責められるのは道理に合わない。」ということだった。しかし結局、六ヶ月の服役処分ということになった。薄田斬雲うすだざんうん（弘前出身の作家）著『豪俠画人野沢如洋』によれば、この話には次のような後日談がある。

確か「連山紅葉」の絵が入賞した後であったと思います。如洋氏は半年余り、津軽弘前の地に帰省し、序ついでに北海道を漫遊したのです。すると札幌で、土地の裁判官で画を好む人があって、如洋氏を招待し、又同僚たちとも会して一夕の宴を張ったというのです。其その家の夫人が琴を弾じて興を添えるといった歓待ぶりです。みんな酒によって、うっとりもしましたが、如洋氏は酒を好まないのです。もっぱら画筆を動かして居たのです。

すると主人の裁判官が「私は梅原であるから、如洋君に梅を一つ画いて頂こう。」と言うのです。それを聞いて、如洋氏は偶々たまたま十年余り

前の或る大波瀾の場面を思い出しました。梅原というと、忘れもせぬ自分が郷里弘前で大喧嘩した時の判事の名なのです。見ると、先刻からどこか見覚えがあると思つて居たが、正に其の判事だったので。

如洋氏は面を向けて、

「梅原さんは私を知つて居られますか。」と問いました。

「えーッ！」と、梅原氏も驚いて如洋氏を凝視しましたが、「然う言へば見覚えのある……一体何処でお目にかかりましたかな。」

「十年前、弘前の裁判所ですよ。あの時の喧嘩巡査の一戸太郎です。」

「えッ！」と梅原氏は、息をのみましたが、やがて破顔一笑、

「いや、奇遇も奇遇、是は恐れ入った。諸君、十年前、私が弘前裁判所に在任中、この野沢如洋君は我輩をして、法廷において胆を冷や

さしめた豪傑です。ここで又会うとは、何という奇遇だろう。」

また、同じく『豪俠画人野沢如洋』に次のような、如洋自身の述懐が載せられている。

併し人間には何が幸いになるか知れたものでないので、其喧嘩が因を成して、我輩をして今日あらしめたとも言いたいのです。何故な



らば、彼の喧嘩なかりせば、我輩も勤続何十年かの巡查として終わったかも知れないのです。又、梅原君の峻烈な訊問がなかったら、我輩の悔恨の情状酌量で未決期間も少なかった事でしょう。今から考えると、此未決監時代が我輩の画道修業にとつて最も効果があつたもので、出獄した時の筆力は、入監前とは見違える程に進歩して居たのです。そして再び巡查生活も出来ず、遂に中央舞台に飛び出した様な次第で、是れはむしろ梅原判事の賜といつていいかも知れないのです。

実際、人間なにか幸いするか。如洋は入獄したために、身辺の雑事や世俗の煩いを避けて、ひたすら画道に精進できたのである。しかも元来竹を割つたような、さっぱりした気性なので、監獄に入つても監守に好かれ、画家だとわかると便宜を図つて独房に入れてくれた。そのうえ、「画を描け。」といつて、こつそり紙や筆墨を差し入れてくれる。おかげで如洋は好きな絵を一所懸命に描くことができた。獄中の修業が、技両に著しい進歩をうながし、心機一転した如洋は、出獄してからせまい津軽の土地を飛び出して、中央を舞台に思う存分画の腕を振るつてみようと決心したのである。

如洋が京都に出たのは二十八歳のとき、一八九三年（明治二十六）のことである。この時から、東京転住の一九三〇年（昭和五）まで、四十年近い京都生活が始まる。如洋がこれまでの雅号の仙蘭を、如洋に改めたのも、京都に移り住んだ当初のことだった。『野沢如洋伝』の

著者森山泰太郎氏はこの改名について「これまでの仙蘭の名は優雅であるが、それだけに快男子のイメージに合わない。京都で日本画壇に雄飛しようと大志を抱く彼が、如洋と改めた心境はそれなりに自己の一つの転機を自覚したからにはかならない。如洋という雅号は、彼自身の選択か、他人の示唆なのか、出典は何なのか、すべて伝えるところがない。『野沢如洋』——いかにもスケールが大きく、文字の配合もよく、無限の可能性を感じさせ、巨匠にふさわしい雅号である。」と述べているが、まさにその通りである。「如洋」という文字は「洋の如く」と読むことができる。如洋はおそらく、自分の画を「洋の如く大きく」自分の心を「洋の如く広く」したいと思いながら、この雅号に改めたのではなからうか。

如洋が中国に滞在した時の痛快な話がある。それは天津で一日千枚画きという大しごとをやったことである。人々の注文に応じて一日に千枚の画を描くことから、筆力、画技、体力、気力とも充実していなければとてもなし得ないことだった。千枚画きのようすを『豪俠画人野沢如洋』では次のように述べている。

そのうち「七草を彩色画に」という注文が出ます。幾ら急いでも之れは五、六分を要します。見ている人々も気の毒に思うのか、晩には慰勞の宴を張ろうといひます。「モウ、如洋君の大手腕は十分に分かったから、此上は皆で簡單なものを注文するとしよう。」と同情が

出ます。すると誰やら、「五重塔」を注文しました。声に応じて如洋が画いたのが、威勢よく高くそびえ立った五重塔です。すると中村愛蔵將軍は、「巧い、それじゃ七重塔を。」といい出した。五重塔は真直ぐに立って居るが、七重塔となったら、曲るだろうと危ぶまれたのに少しも曲りません。筆が疲れる処か、「余裕綽々としている！」と一同は拍手賞讃しました。

すでに如洋は六百五十枚画きました。其時誰か、「後は注文なしで、如洋君の好む画題として如何。」と言いますと、みんな賛成です。如洋氏は愈々油が乗って、筆勢飛ぶが如く、技に神力がみなぎって、午後三時半頃にはついに千枚画き上げて了いました。一同「万歳」を叫んで拍手を送り、四時に終了。

如洋氏は流汗淋漓、座を立てて次の室へ行きましたが、玉突台の処で目眩いがし、台のふちに手をかけて踏み止まったのです。集まった軍人たちは如洋氏に握手を求めながら「此の画人には武人も到底及ばない。」と感嘆しました。

右の文から千枚画きのようすが、よくわかるであろう。千枚画きの快挙は如洋のように日常閑があると写生し、筆を動かして事物を観察したものでなければ、とてもなしえないことだろう。のちに如洋は千枚画きについて次のように述べている。

私は一日に千枚がきというのを二度やったことがある。その一つが天津においてであった。朝の五時頃から始めて、午後の三時半迄に

一千枚の絵を描いた。真夏の酷い暑い日であったが、私のいつもの信念で、何等辟易するところがなかった。前半は注文によって描いた。孔子や、玄徳から、支那の風俗、五重塔にいたるまで、古代の人物、歴史、風俗人情、風景等、実に広い範囲にわたって注文が出た。しかもそれを四、五秒位の僅かな間に描き上げなければならない。考えている閑など全くなく、これまで体験し、見聞し、知感したものを稲妻のように閃かして描かねばならなかった。

全生命を打ち込み、真剣になれば、人間は人間以上の仕事が出来た事を感じた。神機とか、神力というのはそれであろうか。

如洋のこの言葉は、単に絵を描くときの心構えだけではなく、如洋自身の人間としての生き方を述べたものであろう。全生命を打ち込んで生きる、そして絵を描く、これが如洋の生涯の姿であった。

また如洋は深く郷里弘前を愛し、京都や東京に住まいしたときも、しばしば弘前に帰って友人知己と旧交を温めているが、画人として名をなしたあとも、それは変わることがなかった。また郷里の人たちが如洋を訪問すると、どんな多忙な時でも心から歓迎して、もてなすのを常とした。

昭和初年のころ、少年野球がさかんで、全国大会が京都市岡崎球場で開催された。弘前市の朝陽小学校や和徳小学校が、東北代表のチー

ムとして、交互に毎年のように全国大会に出場した。弘前のチームが出場することになると、如洋はチームが宿泊する宿屋の手配をはじめ、駅への出迎えから、応援まで親身になって世話をした。

一九二七年（昭和二）八月、朝陽小学校野球チームが東北代表として、京都の全国大会に出場した時のことである。その時も如洋は、京都駅まで出かけてチームを出迎えた。付き添いの先生が如洋に、「激励の言葉を述べてくれ。」と頼むと、如洋はチームの子供たちを駅前広場の片すみに集めて、ただ一言、

「いいが、みんな。ネプタけんかの精神で行げ。ネプタけんかの。」

と激励したという。

そのとき、選手の一人として参加していた五年生の桜庭武則（のちに西郡長平小学校長）は、如洋の一言でそれまでの気後れが消え、「よし、やるぞ。」という勇気が湧き上がったと述べている。不幸にして朝陽チームは一回戦で敗れたが、その夜如洋は宿に西瓜すいかを持参して、選手一人一人を慰めたという。

如洋は弘前人の持つ豪快な精神と、人に対するやさしきをもった人だったのである。「豪俠画人」とうたわれたのもなるほど——とうなずかれる。

**参考文献** 薄田斬雲『豪俠画人野沢如洋』一九三〇年（昭和五年）

森山泰太郎『野沢如洋』一九七四年（昭和四十九）野沢如洋顕彰会

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、一五〇～一六三頁